シンポジウム

世紀転換期の西洋における日本表象

―パリとロンドンを中心とする文化的交差―

浮世絵や工芸、意匠に代表される日本美術は、近代に入ると万国博覧会での展示や出版物、西洋人が持ち帰った記録、日本人の芸術家や知識人による文化発信などを通じてヨーロッパへ広く紹介されました。こうした多様な媒体を介した紹介が重なり、ヨーロッパではさまざまな日本像が形づくられていきます。これらの文化的情報の蓄積は視覚芸術のみならず、舞台芸術や音楽にも新たな着想をもたらし、異文化を理解し再構成するための基盤となりました。

19世紀初頭から20世紀はじめの西洋諸国では、日本を題材とした歌曲やピアノ小品が一枚刷りの大衆音楽楽譜として盛んに出版されました。これらは後年の日本主題の芸術作品と並行して、あるいは先行して制作されたものであり、当時のサロン文化や家庭音楽における日本像の広がりを示しています。こうした大衆音楽楽譜は、国際日本文化研究センター（日文研）に約二百点が所蔵されており、日本題材の内容や受容の広がりを把握する基礎資料となっています。

本シンポジウムでは、これらの音楽資料を出発点とし、美学・音楽学・美術史・舞踊学を横断してパリおよびロンドンにおける日本表象の形成と展開を考察し、絵葉書を含む当時のメディアの動向にも目を向けながら、世紀転換期の文化的想像力の生成と変容を検討いたします。

登壇者（発表順）

大出敦
（慶應義塾大学法学部教授）

安川智子
（北里大学一般教育部教授）

小泉順也
（一橋大学言語社会研究科教授）

アンドリュー・エリオット
（同志社女子大学国際教養学科教授）

山田小夜歌
（京都精華大学国際文化学部・共通教育機構講師）

コメンテーター

竹内有一
（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

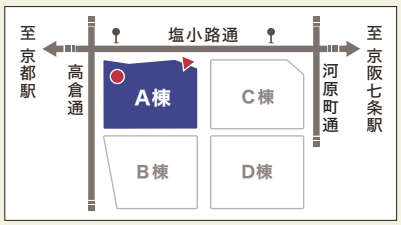
斎藤桂
（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授）

司会・進行

光平有希（国際日本文化研究センター助教）

2/14 2026 SAT. 14:00~17:00

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 伝音セミナールーム



京都市下京区下之町57-1 京都市立芸術大学 A棟1階

地下鉄烏丸線・JR各線・近鉄京都線「京都」駅下車、JR京都駅中央口から徒歩6分
●京阪電車「七条」駅下車 徒歩10分
●市バス4・7・16・81・205・南5号系統「塩小路 高倉・京都市立芸術大学前」下車すぐ
◇ 構内に駐車場はございません。
各種公共交通機関をご利用のうえご来場願います。

入場無料
要事前申込
先着順50名

［申込み方法］
お申込みはWebフォームからお願いします。
※電話やメールでの申込受付はいたしません。

申込期限：2026年1月20日（火）17:00
上限人数に達し次第、応募を締め切ります。

お問合せ先：国際日本文化研究センター 総務課総合情報発信室事務室広報係
E-mail:kouhou@nichibun.ac.jp

※場内誘導や座席等について特別な配慮を必要とされる方は、
開催日の7日前までにkouhou@nichibun.ac.jpまで御相談ください。
御希望に沿うよう可能な限り対応いたします。

主催：国際日本文化研究センター　京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

KYOGEI TERRACE

京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター

人間文化研究機構「開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築」事業

シンポジウム

世紀転換期の西洋における日本表象

―パリとロンドンを中心とする文化的交差―

プログラム

14:00～14:05　開会挨拶（フレデリック・クレインス　国際日本文化研究センター副所長）
14:05～14:15　日文研所蔵音楽資料の紹介（光平有希　国際日本文化研究センター助教）
14:15～14:35　**大出敦**（慶應義塾大学法学部教授）
14:35～14:55　**安川智子**（北里大学一般教育部教授）
14:55～15:15　**小泉順也**（一橋大学言語社会研究科教授）
休　　憩
15:30～15:50　**アンドリュー・エリオット**（同志社女子大学国際教養学科教授）
15:50～16:10　**山田小夜歌**（京都精華大学国際文化学部・共通教育機構講師）
16:10～16:50　コメント／パネルディスカッション
16:50～17:00　総括・閉会挨拶（細川周平　京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長）

大出敦（慶應義塾大学法学部教授）

日本性の創出：クローデルのサウンドスケープ

日本に滞在した欧米人が日本に何を見出したかを音楽を軸にして考察することを考えている。西洋音楽と日本音楽は、絶対的な音階からなる音楽と個々人が自由に音階を調律できるいわば経験的な音楽の対立に還元できる。この経験的な音楽に居心地の悪さを感じる欧米人と逆にこれを積極的に評価する欧米人とに分かれるが、ここでは経験的な音楽を日本的なものとして高く評価したポール・クローデルを取り上げる。彼は大正時代の日本に滞在し、能、文楽、歌舞伎といった日本の古典芸能に接し、作品を残している。そうした作品の音楽に関する言説を分析し、彼が日本の音楽から、彼独自の日本性を創出したことを浮き彫りにする。

安川智子（北里大学一般教育部教授）

3つの所蔵楽譜から考える20世紀初頭のフランスにおける「日本的な音楽」とその変化

日文研所蔵の楽譜は、20世紀初頭のフランスにおける音楽のジャポネズリ（日本趣味）の実態を具体的に浮かび上がらせる。本発表では特に以下の3つの楽譜に注目し、段階的な変化の過程を考察する。1）ローレンス作曲「蝶の舞」（1907パリ）はジュディット・ゴーティエの劇作品「愛の姫君たち」の挿入曲。ヴァグネリスムとジャポニスムはなぜ親和性が高いのか。2）グリフス作曲「古代中国と日本の5つの詩歌」（1917ニューヨーク）では中国と日本の五音音階が具体的に示される。3）松山芳野里編曲「日本の特徴的な5曲の歌」（1922パリ）は、日本人歌手が「本物の日本」を広めていく好例であり、歌手を通じて日本の作曲家にもジャポニスムの影響が及ぶ。

小泉順也（一橋大学言語社会研究科教授）

ジャポニスム楽曲を彩るイメージの一貫性と多様性：
装飾されたテクストとモチーフの分析を通して

いわゆるジャポニスム楽曲のシートミュージックの表紙には、紋切型ともいうべき日本のイメージの反復が認められる。同時に、テクストの配置や装飾性に多くの工夫が凝らされ、ときに縦書きも活用しながら異国情緒を喚起している。オーギュスト・メトラ作曲《イエッダ》（1878/2017複製）のように、日本的モチーフを過剰に詰め込んだ表紙絵の事例もあれば、クロード・デルヴァンクール作曲、ポール=ルイ・クーシュー仏詞の《露の世：日本の14の古い歌》（1927）のカバー絵のように、余白の効果や視線の誘導などを巧みに活かしたデザインも認められる。これら2つの作例を両端に据えながら、このジャンルにおける造形的特徴の一貫性と多様性を分析する。

アンドリュー・エリオット（同志社女子大学国際教養学科教授）

国際的ソーシャル・ネットワークにおける絵葉書と日本（1900～1930年代）

日文研所蔵の大衆音楽楽譜は、ラジオや蓄音器普及以前に主要な音楽配信メディアとして機能した。本発表では、同様に近代固有のメディアである絵葉書に着目し、20世紀初頭の日本像形成に果たした役割を考察する。絵葉書は単なる絵ではなく、生産者と消費者が共同して作り上げた「共有の営み」であった（Pyre, 2021）。日本国内外から書き送り流通した「日本絵葉書」に焦点を当て、デザイナー、印刷業者、販売者と購入者、書き手と受け手といった国際的コミュニティのあいだで生じた複雑な相互作用を検討する。さらに、国際観光にまつわる事例を中心に、日本とヨーロッパの収集家同士がやり取りした絵葉書やヨーロッパ諸国における日常的通信手段としての絵葉書にも触れ、イメージ生産を支えた物質的空間と出会いの重要性を明らかにする。

山田小夜歌（京都精華大学国際文化学部・共通教育機構講師）

英国のバレエにみられる日本表象―舞台美術、音楽、そして身体

1860年代後半から1900年代初頭にかけて、欧米では日本を題材にした舞台作品が数多く制作された。英国では、大きな話題をさらったサリヴァンの《ミカド》（1885）の初演に先行して、1870年にはすでに日本を題材とした舞台の上演が確認できる。以降、1900年代まで日本をあつかった音楽劇やバレエが頻繁に舞台にかけられるようになる。本発表では1870年代おわりから1900年代はじめにロンドンで上演されたバレエ3作品を時系列に紹介する。舞踊という、言語を用いず身体表現と視覚表現で構成される舞台において、日本や日本人はどのように表象され、人びとはそれをどのように観たのか。バレエの舞台上の日本表象と観客の視線の変化を辿り、その特徴を確認する。